

早期教育の是非

2025. 5. 19

子育ては十人十色という。一方で、自分の子育てに迷い、自信を失う親もいることだろう。子育てに普遍的な法則のようなものはないのだろうか。

子どもを育てていると、勉強などで直近の目標ばかりを追わせがちになる。そうではなく、将来どういう人生を送ってほしいのかを考えて接するようにする。子育てといっても、18年間限定である。18歳から先は、もう自分の世界ができてくるだろう。その先は、元気に好きな道を歩んでくれればよい。実際、手のかけようもなくなる。

早期教育の是非が語られることがある。早期教育がいいかどうかの議論は昔からあった。要は、自走できる子どもを育てることが大事なのであろう。自走とは、自分で物事を考え、判断し、自分の人生を選び取れる力があることである。乳幼児期から、その人間の根っこを育てていく必要がある。

最近では、子どもの将来を心配し、赤ちゃんのうちから英語学習のCDを聞かせているご家庭もあることだろう。日本語やモンゴル語、韓国語といったウラル・アルタイ語系を母語にする人たちは、生まれながらに英語を理解することが難しいそうである。英語は、インド・ヨーロッパ語系という別の分類になる。同じことをいうにも日本語とは語順からして違う。動詞の格変化や時制、複数形のつくり方、特に **a** や **the** のような冠詞の使い分けなどは分りにくい。

ある研究結果がある。幼児期に英語圏に渡った子ども、現地で生まれた子どもは、小さいうちは英語の発音や聞き分けが現地の子どもと変わらない。しかし、小学校に入ると算数以外、読み書き能力が求められる教科の学習についていけなくなる傾向が見られた。

その反対に一番早く現地人並みの英語読解力を身に付けたのは12歳くらい、つまり小学校卒業前後で日本を離れた子どもたちだった。英語読解力の水準に達するのに要した期間は、概ね1年半である。小学校レベルまで日本語をきちんと学んだ子のほうが、結局は後から英語の読解能力もつきやすいということになる。日本語の基礎がきちんと身に付くには12年ほどかかる。日本人に生まれたなら、日本語で土台をきちんとつくらないと、その上に何も載らなくなってしまう。

子どものことを思えば思うほど、早期教育に目がいきがちである。だが、乳幼児期には、絵本の読み聞かせや童謡の歌い聴かせが大切なかもしれない。三男一女を育て、全員を東京大学理科三類に進学させた佐藤亮子さんは、絵本一万冊、童謡一万曲の教育で注目を浴びている。一万という数字は、なかなか真似できるものではないが、その方向性には見習うべきものがある。昔から行われてきたことには、先人の知恵に支えられた大きな意味があるのである。